

教育事業 「青少年教育指導者等の養成及び資質の向上」

事業名	青少年教育施設ボランティアセミナー とかしきボランティアスクール
実施 期 間	平成23年4月22日(金)～24日(日)
担当者	企画指導担当及びボランティアコーディネーター 上條弥生



I 事業の趣旨

少子化や核家族化などによる社会構造の変化や目まぐるしく変化する情報化社会の中で、青少年にとって自己の在り方や生き方を考え、主体的に物事に関わる能力や態度の育成は大きな課題となっている。このような社会においてボランティア活動は、自己肯定感を高め、他者を理解し、思いやりの心や豊かな人間性、社会性を養う活動として重要である。

現代社会においてボランティアを希望するものは年々増加しているが、ボランティアを養成するシステムは十分とはいえない状況にあり、当青少年の家がその養成を行う意義は大きいと考える。そこで、「法人ボランティア育成カリキュラム」を基に当青少年の家の特色である海洋研修プログラムも取り入れながら渡嘉敷島の自然の中で主体的な活動の場を提供し、体験を通じた学びを支援した。

また、過年度の経験豊富なボランティアを中心とするプログラム展開で、当青少年の家での積極的なボランティア活動の動機付けができるようにした。

(2)健康管理について

朝のつどいや活動中に健康管理、体調チェックを職員とボランティアとで行った。

(3)安全管理について

野外活動では、活動前にオリエンテーションを行うと共に職員や先輩ボランティアで役割分担し活動を見守った。

5 活動のようす

1日目(4月22日)

《講義》青少年教育の理解

講師：沖縄キリスト教短期大学
准教授 張本文昭氏

II 事業の概要

1 事業の目的

これからボランティア活動を始めの方を対象にボランティア活動への理解を深め、ボランティアとしての活動に向けた期待と意欲を高めるとともに、必要な基礎的知識・技能を習得させる。

2 参加対象及び募集人員

高校生以上 30名

3 参加状況

男性11名、女性17名 計28名

大学生・・・17名

高校生・・・10名

社会人・・・1名

4 実施上の留意事項

(1)運営について

独立行政法人国立青少年教育振興機構における法人ボランティア養成共通カリキュラム13時間(「青少年教育の理解」「ボランティア活動の意義」「活動スキル」など)に基づく内容を2泊3日で実施した。



《実習》レクリエーションスキル
担当：国立沖縄青少年交流の家
上條 弥生



《仲間づくりで緊張ほぐし》



《イニシアティブアクティビティに挑戦》



《つどいの意義を知る》



《先輩ボランティアによる団体紹介》



《ふりかえりでピーイングを作成》

2日目（4月23日）
《実習》海洋研修での安全管理
担当：上條 弥生



《実習》命を守る～救命救急法
講師：宮城 直久 氏



《実習》ボランティア活動の意義
担当：樋口 真紀、先輩ボランティア



《クラフトの指導を実践から学ぶ》

担当：北岡 哲治、ボランティア
《テント設営 OR の方法を学び実践》



《火おこしの実践と炊飯活動》

《実習》海洋研修



《パティの大切さを体感》



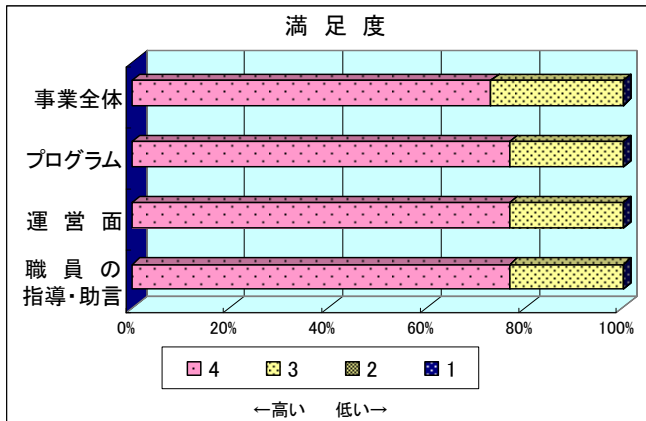
《ふりかえり：シェアリングで想いを語る》



《修了証書授与》

6 アンケート結果

(1) 満足度



(2) 参加者の声

《良かった点》

- 講師の話で学ぶこともあったし、人と触れ合って学ぶこともたくさんあった。
- 自分にとって、とても変化があった。
- プログラムが充実した内容で、野外活動に必要な知識・技術を学ぶことができた。
- 楽しいことも、大変なこともみんなと協力しあえた。
- プログラムなどいろいろと工夫されていて、一人ひとりとじっくりと接することができた。
- 最初は、みんなの前での発表や発言はすごく緊張したのですが、みんなから刺激を受けたり、発表する場がよくあったので、こういう“場”をつくっていただけて良かった。

《改善すべき点》

- ▲最初に目標を明確にしておきたかった。グループやペアでその理由について話が出来る機会が欲しかった。
- ▲時間にゆとりがなかった。
- ▲緊張感が足りない。
- ▲次にやることを行動に移すのが遅いし、もっとチームでコミュニケーション力を高めて欲しい。

Ⅲ 成果と課題

1 事業の成果

- 渡嘉敷島の自然、当施設のフィールドを活用したプログラムの実施において、これから当青少年の家のボランティアとして活動するための必要な知識・技能を習得できた。また、主体的に事業を運営する先輩ボランティアの姿から学び、ボランティア活動に対する期待・意欲を高めることができた。
- 高校生、大学生の異年齢交流とともに、当青少年の家の教育手法をも用いて“仲間づくり”を意識して行ったことにより、今後スタッフとして活躍するためのチームワークを体感することができた。

2 今後の課題

本事業は新年度が始まってからの募集となり、大学の新生オリエンテーションに出向いての案内や、施設利用の高校生・大学生を中心に周知を行った。定期的に4月末の平日を含む3日間での開催が参加に対するネックとなっている学生も多く、時期・期間ともに検討が必要である。

また、青少年教育指導者等の養成・研修事業の観点から、多くの生徒・学生に体験活動の魅力を伝えるとともに青少年教育施設のボランティアであり、指導者である立場を理解し、意識できるようなプログラムの検討とともに、ボランティア活動の実践を継続することによっての育成を図れるようなシステムの構築が必要である。

Ⅳ おわりに

今回の参加者の様子から、初めて出逢う仲間との積極的な関わりや、自己啓発的な目線でのプログラムへの参加が見られた。異年齢交流の中で、様々な刺激を受けるとともに、教育指導者としての意識をもって教育活動に携わることは、施設のボランティアとしても個人としても成長に繋がることである。当青少年の家の特色である海洋研修や、星空観察などの自然体験活動、炊飯活動、集団宿泊体験活動をとおして、自らが体験することの素晴らしさや意義を体感し、それを伝え、支援していく立場になることは、青少年にとって自己の在り方や生き方を考える機会となり、主体的に物事に関わっていかうとする態度を育成できると考える。

本事業受講者が当青少年の家のボランティアとして、教育事業の企画・運営を行い、またボランティア活動の実践を継続することによって、教育指導者として成長できる機会となることを期待したい。